

70

江戸時代中期の談義本『医者談義』(1759)にみる 病家への教訓

平尾真智子

順天堂大学医学部医史学研究室

江戸時代を通じ、病家の医薬利用に関する啓蒙のための書物はさまざまな形態で発刊されている。初期には「仮名草子」という小説があり、服部敏郎による『江戸時代医学史の研究』に「庶民文芸と医学」という研究がある。しかし中期以降の医療に関する庶民文芸書に関しては研究がほとんど行われていない。江戸中期の小説の一種「談義本」に、病家の医薬利用を主題とした『医者談義』(宝暦9年、1759刊)があり、その内容と看護史上の意義について明らかにする。

本研究では内藤記念くすり博物館所蔵の『医者談義』5巻を研究対象とし内容を分析した。他に杏雨書屋、順天堂大学山崎文庫、国立国会図書館所蔵の『医者談義』を参考にした。京大富士川文庫、早稲田大学、山口大学にも所蔵がある。

『医者談義』は和装書(半紙本)で5巻5冊である。序、目録、本文で構成されている。題簽角書には「養生教訓」とあり、『(養生教訓) 医者談義』という別タイトルがある。漢字ひらがな混交文で、漢字には振り仮名が付されている。1巻は10丁、2巻は15丁、3巻は15丁、4巻は19丁、5巻は20丁である。各巻には1丁分(2・4巻は2丁分)の挿絵がある。作者は「糞得齋(遣尿)で本名は不明であるが、内容の医学的知識から医者と想定される。くすり博物館の蔵書には、表紙裏に墨書による主旨と自筆の署名がある(序はない)。

目録は、一人参好悪之談義、一配剤大小之談義、一加持祈祷之談義、一病家需医之談義、一至賤中有殊常功談義、一疱瘡神之談義、一医者発不殺之談義、となっており、7章で構成されている。墨書には「此書伏羲神農以来和漢医家之故実を詳にして病家に便なるべきことを記」とある。内容は医の起源・医の系譜、人参の知識、陰陽五行の理、薬の煎法、医の倫理、和漢の医者(曲直瀬父子の記載多)に関するもので、俗医の暴利、医薬の誤り、医者のお話もあり、物語的で教訓的な面がある。看病は2ヶ所に記されている。出版者は皇都書林(京都)の小田九郎右衛門、林宗兵衛、林伊兵衛、加州書林(金沢)の能登屋治助である。

『医者談義』は『国書総目録』では「滑稽本」であるが、江戸文学史上の分類では、小説の一種「談義本」である。談義本は、狭義では江戸時代の1752年(宝暦2)から89年(寛政元)に寛政改革で弾圧されるまで流行した風刺的な小説の総称で、広義では正徳、享保に端を発して、宝暦、明和に栄え、寛政、享和に終息する、俗間教導の苦楽を滑稽の甘皮に包んで、半紙本3冊から5冊に仕立てた読本の一種のことである。当時は「教訓本」「よみ本」「談義本」などといわれた。談義本は、滑稽さと教訓を併せ持ち、滑稽本のはしり、教訓談義本とも称される。談義僧・講談師などの口調をまね、おかしみの中に教訓をまじえ、社会の諸相を風刺した。談義本は庶民が対象で、将軍吉宗の庶民教化の施策方針への反応の顕れ、と考えられている。「教訓本」は宝暦以後は「実用書」として代わられた。江戸中期の庶民の文芸書の一種の談義本に『医者談義』があり、病家の医療(看病を含む)に関する教訓を内容とし、庶民の啓蒙/教育に用いられた。